

成果報告書

記入日 2017年 11月 24日

氏名 田代裕一郎	渡航先国名 大韓民国	所属機関 ソウル大学校人文大学考古美術史学科
研究テーマ：17～18世紀朝鮮白磁の研究 - 特に文様装飾と消費の関連をめぐって -		
研究期間：2015年 9月～2017年 8月		
研究成果（概要） 韓国の大学院正規課程に在籍しながら、17～18世紀朝鮮白磁に関して、消費地遺跡出土品に着目し、文様装飾と消費の関連を考察するうえで必要な資料の収集と分析を行った。		
研究成果（詳細） 報告者は、交換留学ではなく、2017年9月に韓国・ソウル大学校人文大学考古美術史学科(博士課程)に正規入学し、2017年8月に単位取得修了した。在学中は、張辰城先生(ソウル大学校)の元で指導を受けながら、田勝昌先生(AmorePacific美術館)をはじめとする陶磁史の諸先生方から個人的な指導を受け、上記の研究テーマを進めた。以下、留学の目的、研究の方法、研究の成果の順に述べていく。 (1) 留学の目的 本研究の基盤となる修士論文では、同時代絵画と親近性のある意匠の文様装飾が登場する18世紀初期の朝鮮白磁に対し、その文様装飾に着目して絵画史の視点から解釈を試みた。具体的には同時代絵画と意匠を比較し、絵画との関係性を考察するものであるが、文様装飾の登場背景にある「消費」の変化(17～18世紀)をより具体化させる作業において課題を残していた。 この課題を踏まえて、報告者が着目したのは、2000年代以降、ソウル市内の再開発に伴い盛んに発掘されている朝鮮時代の消費地遺跡からの出土品である。数万点に及ぶ膨大な出土品のなかには17～18世紀朝鮮白磁も多く含まれているが、興味深いことに遺構の性質や地域に応じて文様装飾の主題やその製作水準が少しずつ異なる。留学を機会として、出土品を収蔵する韓国国内の研究機関で調査を行い、時代ごと、遺構ごとの差異を整理することで、文様装飾と消費の関連性を具体化させようと試みた。 ソウル大学校の張辰城教授は、消費という観点からの韓国絵画史研究で多くの業績を残している。修士論文で取り組んでいる文様装飾の意匠考察に加えて、張辰城先生の研究方法論を応用して文様装飾と消費の関連を考察することで、同時代社会経済ともリンクする、立体的な陶磁史解釈の構築を試みた。 (2) 研究の方法 正規入学であったため、課程修了のために定められた単位の取得が必要であったが、講義の合間に韓国国内の発掘調査報告書が集まるソウル大博物館図書館に通い、ソウル市内における朝鮮時代の消費地遺跡に関する報告書を通読し、スキャンを重ねた。これらの報告書は、必要に応じて発掘機関に個人配布を依頼し、入手困難な場合は古書店で購入するなどした。		

また講義では、可能な範囲で研究テーマに即した授業発表を行う便宜を図って頂いた。2016年3～6月には、「歴史考古学」の講義では、消費地遺跡のなかで最も代表的な清進洞遺跡に関する発表を行い、さらに2017年3～6月の「韓国工芸史演習」「韓国陶磁史演習」において、範囲を漢陽都城内の全域に広げ、朝鮮時代全体を通じた出土品の様相と特徴を整理した。ここでの発表は、『中近世陶磁器の考古学』（2017年10月刊行）にて文章化する機会を得、現時点での研究成果を整理することができた。また研究テーマと直接結びつくものではないが、国史学科の講義を受講しながら、古語における漢字表記法「吏読」を学んで文献史的知識を得るなど、長期的な観点で研究に有用なスキルの習得に努めた。

このほか美術館博物館および発掘機関で出土品の実見調査をおこなった。また2017年夏には京畿陶磁博物館で約2ヶ月ほど発掘作業に携わることができた。これは消費地遺跡ではなく、同時代の生産地遺跡である17-18世紀の窯跡(京畿道広州松亭洞、宮坪里)であるが、消費地遺跡出土品を考えるうえで編年の基準を得ることができた。また韓国における発掘作業の過程を実際に体験して韓国の考古学的方法論を学ぶことができたのは、消費地遺跡出土品を検討するうえで貴重な経験となった。

(3) 研究の成果

このようにして研究を進めるなかで、ソウル市内の消費地遺跡をめぐって、2点の問題に直面した。第一に17世紀以後の地層に関して攪乱が激しく、遺構の残存状態が良好でなく、出土品の先後関係が明確でないという問題である。そして第二に遺構を確認できても文献史料からの裏付けができず、どのような階層が居住していたのか特定することが困難という問題である。以上のような状況から「文様装飾と消費の関連」をめぐらる問題をより明確に表出させるためには、17～18世紀のみを切り取り、遺構を切り口として分析するのではなく、前後の時期を含めて俯瞰する必要があると考えるようになった。

そのように視点を変えるなかで見出した端緒の一つとして、王権を象徴する龍の文様を伴う朝鮮白磁がある。15～16世紀の製品はその出土地域が王宮周辺に限られ、出土点数も極めて限られるのに対して、17世紀以降の製品は出土地域が漢陽都城全域に広がり、出土点数も急増する。また15～16世紀の製品は、いずれも王室の器を製作するため京畿道広州に設置された官窯(司甕院分院)の製品であるが、17世紀以降の製品には、民間向けの窯業活動をおこなった地方窯の製品も含まれている。つまり17世紀を境界として、王権を象徴する龍の文様をめぐらる意味の変化(相対的な世俗化)、そして流通の変化(地方窯製品の供給)が始まったと見られる。

この変化は、張辰城教授が絵画史分野で指摘した、古董書画に対する消費の変化(※)と時期的にほぼ一致する。陶磁史分野のみに限定される事象ではなく、物質文化全体に敷衍できる事象であると考えられ、博士課程を単位取得修了した現在、これらの問題を博士論文に整理すべく取り組んでいる。

(※) 張辰城,「朝鮮後期古董書画収集熱気性格: 金弘道の〈布衣風流図〉と〈士人肖像〉に対する検討」,『美術史と視覚文化』3号,(美術史と視覚文化学会,2004).【韓国語】

このほか留学期間中、口頭発表を3回(日本:1回、韓国:2回)、論文発表を2回(日本:1回、韓国:1回)行った。とくに留学序盤で韓国の美術史学界において中心的な役割を果たしている韓国美術史学会で自らの研究成果を披露できたことは、韓国の研究者との人的ネットワーク形成に大きく寄与した。ここでの発表内容は、2017年6月に論文として発表したが、韓国で口頭発表と論文発表の両方を経験できたことは、今後も韓国陶磁史を研究しようとする自分にとって大変貴重な機会となった。

口頭発表

- 2015年12月：韓国美術史学会 秋季学術大会発表【韓国語】
(発表題目：「秋草手」を通して見た近代日本の朝鮮白磁認識)
- 2016年6月：国立中央博物館 NMK 2016 Fellowship 発表【韓国語】
(発表題目：蘇った高麗青磁 -日本・高田焼について-)
- 2016年8月：東洋陶磁学会 第2回研究会発表【日本語】
(発表題目：「秋草手」と称される朝鮮白磁に表された草花文様について -製作年代および製作地、図様の解釈と意義をめぐって-)

論文発表

- 「『秋草手』を通して見た近代日本の朝鮮白磁認識」, 『美術史学研究』294号, (韓国美術史学会, 2017. 6). 【韓国語】
- 「ソウル・漢陽都城内遺跡出土の朝鮮時代陶磁器 -その流通消費をめぐる基礎的研究-」, 『中近世陶磁器の考古学』7, (雄山閣, 2017. 10). 【日本語】

(※)このうち『中近世陶磁器の考古学』は留学終了後の2017年10月に刊行されたものであるが、留学期間中に執筆したものであるため、これに含めた。

また研究テーマに限定せず、韓国陶磁史に関するフィールドワークを積極的に行った。

とくに留学期間中には、国内外から韓国美術の名品を集めた「細密可貴」展(2015年、三星美術館 Leeum)、そして新安沖沈没船の引き揚げ品についてその全容を紹介した「新安船から探し出されたもの」展(2016年、国立中央博物館)、さらに世界でも有数の高麗青磁コレクションを一挙に公開した「青瓷」展(2017年、梨花女子大学校博物館)など、大規模な記念碑的展示が相次いで開催され、貴重な伝世品および出土品を実見する機会に恵まれた。

さらに展示のみならず、韓国各地の発掘現場にもできる限り足を運んだ。遺跡の多くは、作業終了後に再度埋め戻されるため、再びは二度と訪れないチャンスを逃さぬよう、現場説明会の情報収集に日々努めた。とくに高麗青磁の窯跡としては初めて「工房」の遺構が確認された高敞郡龍溪里の発掘現場、そして朝鮮半島南西部において初めて高麗時代初期の「塼築窯」(煉瓦造りの窯)の遺構が確認された鎮安郡道通里の発掘現場を見学できたことは、韓国陶磁史を学ぶ者として忘れられない思い出となった。

充実した留学生活を送ることができたが、報告者が在籍したソウル大学校人文大学考古美術史学科(博士課程)には、美術館博物館で働きながら研究活動を行っている学生も多かった。しかし松下幸之助国際スカラシップ奨学金を頂いたことで、衣食住の心配なく学業に専念することができた。

手厚いご支援をくださった松下幸之助記念財団様にこの場を借りて深く御礼申し上げます。

留学中の生活・研究でのトピックス

(1) 韓国の大学における教育システム

日本の博士課程は、基本的に自らの研究(あるいは研究分野)に専念する印象があるが、韓国の場合は、単位取得修了まで様々な講義を受講し、多くの課題をこなす必要がある。自らの研究との両立に悪戦苦闘する日々であったが、より長期的な視点に立った際に活用できそうな方法論、または思いがけないアイデアを得る機会となり、今後韓国陶磁史の研究を進めるうえでかけがえのない財産を得ることができた。

(2) 留学生活を取り巻くダイナミックな政治変化

周囲の友人達からよく「韓国の歴史的瞬間に留学した」と言われる。大統領弾劾をめざす市民の「ろうそく集会」、弾劾を阻止撤回させようとする陣営の集会(いわゆる「太極旗集会」、新たな大統領選挙、それぞれを現場で直接目撃して、体感できた。とくに光化門前の大通りを隙間なく埋め尽くす数十万の市民を前にした記憶は、生々しく、印象深く思い起こされる。

自分はいくまで日本国民であり、韓国政治に対して意見する立場ではないと個人的には考える。また韓国陶磁史という自らのライフワークと直接関連するものではない。しかしダイナミックな政治変化と人々の議論に包まれながら、研究テーマのバックグラウンドにある「韓国」あるいは「韓国人」とは何か、不可避免的に考えを巡らすこととなった。容易に答えを見つけ出せる問いではないが、2015年9月～2017年8月に韓国で過ごせたことは、韓国陶磁史の研究を志す者として貴重な体験となった。



(左) 窯跡の発掘現場(2017年7月18日、本人撮影)

(右) 「ろうそく集会」で光化門前を埋め尽くす人々(2016年11月12日、本人撮影)

今後の社会貢献

日本で韓国陶磁(より広く韓国美術)の研究を続けながら、留学を通して培った人的ネットワークをもとに日韓の研究者を結ぶ架け橋として活躍したい。

日本人と韓国人は、容貌が似ており、また同時にある程度価値観や考え方を共有しているが、異なる部分も多々ある。学会発表の作法、論文における論理展開も異なる。そのような違いによって生まれる「結果」を頑なに日本人の物差しで捉えようとして、韓国を理解できずにいる場面を(いわゆる「嫌韓本」に限らず)帰国後何度も目撃した。どのようなコミュニケーションであれ、まずは相手の価値観や考え方を分析理解する必要がある。しかし日本において韓国学研究者は、極めて少数である。今回の留学を通して考え続けた「韓国、韓国人とは何か」という問いの答えを今後も探し続け、その成果を日本社会に還元し、少しでも相互理解に寄与できればと考えている。